

須田記念

2021年8月

第5号

視覚の現場



特集

ジャンルを越えて



目次

第5号の発刊にあたって／原田平作…………… 2
表紙解説／中谷伸生…………… 4

須田国太郎の言葉

「簡素美」／須田国太郎（コメント／中谷伸生）…………… 5

口絵カラー図版…………… 9
菅 楯彦（中谷伸生） 秋岡美帆（原 舞子） 菅原布寿史（中谷伸生） 植松永次（高曾由子）
染谷 聡（土田真紀） 川口茜漣（中谷伸生） 山本あずみ（中谷伸生） 滑川みざ（天野和夫）
（紹介順は作品の性格を考慮して配列）

特集 ジャンルを越えて

特集「ジャンルを越えて」／中谷伸生…………… 18
デザインと芸術の相克——日本宣伝美術会の場合／熊倉一紗…………… 19
植松永次——「つくる」をめぐる試行／高曾由子…………… 23
『朱樂』と「座朱樂プロジェクト」の取り組み／中島小巻…………… 26
ジャンルを越えて——芸術院会員の選考に触れて／中谷伸生…………… 29
カメラを手にした八木一夫／花里麻理…………… 33
荒川修作+マドリン・ギンズとは何者なのか／三村尚彦…………… 38
陶磁史の新たな頁を開く——光琳・乾山の合作／リチャード・ウィルソン（中谷伸生訳）… 41

今言いたいこと

歴史的建造物と現代美術——異種の展示スペースに対応した現場からのレポート／天野和夫… 46
文化を繋ぐ：地元に残された湖北のスケッチ——竹内栖鳳と長浜／國賀由美子…………… 49
東京の「空」に想う——日本橋の青空は誰のもの？／近藤 壮…………… 53
できなかった展覧会「無辜の絵画」のこと／寺口淳治…………… 57
デザインの現在／永井隆則…………… 60
危機下の美術館——占領下における京都市美術館／中谷至宏…………… 63
堺 アルフォンス・ミュシャ館の歩み——指定管理下の作品保存と活用／花澤 志…………… 67
自校史教育施設から開かれた大学博物館へ／松浦 清…………… 71

SUMMARY／各執筆者（川上幸子訳）…………… 77
財団からのお知らせ…………… 78
編集後記／中谷伸生…………… 86



表紙解説・表

北野恒富《ポスター・足利本銘仙》

1928年（昭和3）

平版（紙） 100.4×59.6cm 凸版印刷株式会社 印刷博物館蔵

北野恒富《春駒》

1928年前後（昭和初期頃）

絹本着色 42.1×50.5cm 個人蔵（筆者撮影）

足利銘仙会が高島屋を介して恒富に依頼して製作したポスター。栃木県の足利は安価で丈夫な絹織物の産地で、大正から昭和初期にかけて足利銘仙会は百貨店と提携してブランド化を目指した。銘仙とは江戸時代後期から日常用に生産されてきた絹の平織物のことである。少々憂鬱そうな女性は、良家の令嬢といったところであろうか。顎に当てられた指のモチーフは、いささかわざとらしく見えるが、逆にそれが魅力的でもある。多少とも翳のある人物をポスター化するあたり、恒富の非凡さを垣間見ることができのかもしれない。西山純子氏によれば、背景の菊花紋は、本ポスターが製作された1928年（昭和3）に行われた昭和天皇の即位の礼に見られる復古調の雰囲気を示すとともに、そのデザインにはモダンな感覚が見てとれるという（『没後70年 北野恒富展』図録、2017年）。恒富が製作したポスターの中でも傑作に値する。

《春駒》は、上村松園らの「型」を重視する京都の美人画とは異なって、あらゆる箇所に筆触の跡を残す恒富独自の美人画である。そうした造形感覚が水墨画や油彩素描を想起させるほどに生き活きとした日本画をつくりあげたといつてよい。画面左手に見られる「春駒」とは、馬の頭部をかたどった張り子で、下に車を付けて子供が遊ぶ玩具である。また、伝統芸能の春駒の踊りは、古くは神が訪れて祝福するために行われたが、江戸時代には宗教性が衰えて、大道芸の一種となり、門口に立ち芸を行って金品を受け取る門付芸となる。（中谷伸生）



表紙解説・裏

須田国太郎《山姥》

1942年（昭和17）

紙・鉛筆 26.0×18.0cm 大阪大学蔵

（出典：『能・狂言デッサン』展、大阪大学、2010-2011年）

須田国太郎の能デッサン《山姥》。京都の大江能楽堂で昭和17年（1942）6月12日に京都金春会によって、主人公である妖怪の山姥を桜間金太郎が演じた。越中および越後の上呂山中で暮らす山姥の物語は、「善悪不二」という禪的な思想を表明し、山姥の曲舞は「煩惱即菩提」を説く内容で、作者は世阿弥ではないかと言われているが、正確には分からない。このデッサンは、能の後半に登場するシテの山姥で、扇を持った手を前に差し出し、大きく脚を踏み出した様子を描いている。簡略に形づくられた姿は、無駄な線描をまったく排除し、立体感のある演者の動きを的確に捉えている。下半身の多くを省略して、空いた場所に「金輪際に及べり」という文字が書き込まれた。「山姥」のデッサンは、計49点あり、本作品はその中の1点で、全盛期の金太郎の芸を彷彿させると評価が高い。秀逸な5千点にも及ぶ須田の能・狂言デッサンは、須田芸術の秘密の一端を露わに示すものであり、その本質は「動き」である。（中谷伸生）